

日本歌曲・歌詞背景の研究（その2）

文部省小学校学習指導要領共通教材曲において

坪田 信子

仁愛大学人間生活学部

A Study on the Background of Japanese Songs and Lyrics (Part 2)

As found in all textbooks in the Guidelines for the Course of Study in Elementary Schools established By
The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

Nobuko TSUBOTA

Faculty of Human Life, Jin-ai University

歌曲の生命を大きく担っているのは「詩＝ことば」である。世界各国にはそれぞれの母国語による詩に付曲された歌曲があり、わが国ではそれが、日本語の原詩による「日本歌曲」となる。

本研究ではその視点を「歌詞の背景」に置き、「日本歌曲」の原点となった明治以降の学校唱歌と、* 文部（科学）省小学校学習指導要領音楽科に示されてきた表現（歌唱）分野の「** 共通教材曲」に焦点を当て、引き続き探究を進めるものである。研究（その1）では、明治末期から今日までの約100年間、小学校音楽教育の教材となった歌曲において、その不可欠の要素である「歌詞」はどのように認識され位置してきたかと言う視点から探究をすすめた。その結果「共通教材曲」には、「日本歌曲」の成立・発展の過程へと受け継がれた「日本の心」と言う抒情性を深く育む源となった歴史的意義があることが改めて確認された。本研究（その2）では、それらの「共通教材曲」の「歌詞」は唱歌教育のなかではどのように解釈・指導され世代を超えて受け継がれたのかについて、その背景の一端を探るものである。

* 文部科学省／平成13年度の中央省庁再編により旧「文部省」と旧「科学技術庁」が統合した名称

** 共通教材曲／小学校指導要領で学年ごとに歌唱と鑑賞それぞれに示された3～4曲の必修指導曲

キーワード：尋常小学読本唱歌，共通教材曲，尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釋，唱歌教育

I はじめに

明治44年（1911年）から大正3年にかけて「尋常小学唱歌」が唯一の官版唱歌集として第1学年から第6学年用に順次出版された^{注1)}。

これらの原本となったのは、明治43年発行の『尋常小学読本唱歌』^{注2)}（全一冊）である。『尋常小学読本』^{注3)}中の韻文教材をとり、文部省編集委員（当時の東京音楽学校教官／上真行，小山作之助，島崎赤太郎，楠美恩三郎，岡野貞一，南能衛^{よしえ}の諸氏）が作曲した。

全27曲中，“かぞえ歌”だけが日本古来のわらべ歌で、他は全て我国の音楽家による新作の曲であることに大きな特色があり、純粋な意味で最初の「文部省唱歌」ともいえる。

この『尋常小学読本唱歌』を前身として作られた「尋常小学唱歌」は、新たに作詞委員（芳賀^{はが}矢一を委員長とした上田万年，尾上八郎，高野辰之，武島又次郎《羽衣^{やつなみのりま}》，八波^{やつなみのりま}則吉，佐佐木信綱，吉丸^{かずまさ}一昌）が置かれ、作曲委員（湯原元一を委員長とし前年の作曲家達全員と田村虎蔵）と合わせた文部省教科書編纂委員

注1) 文末の「図版1」で表紙写真を表示

注2) 文末の「図版2」で表紙写真を表示

注3) 当時の国語の教科書

によるもので、国定ではなくても、民間の唱歌集を圧倒しきって殆ど全国の小学校で用いられていたため、事実上国定教科書と同じ存在であった。

「尋常小学唱歌」発行後20年を経た昭和7年、その間の国家主義、軍国主義、超国家思想の強化を反映して『新訂尋常小学唱歌』が発行された。これは、前の教材の大部分をそのまま転載しての増補改訂版で、そこに若干の新作が加わり、その後の音楽指導の進歩に即した伴奏付の教師用別冊も発行された。

II 研究(その1)より

昭和20年第二次世界大戦における我国の敗戦後、新制小学校発令に伴い昭和22年、文部省小学校指導要領が示された。音楽科に掲げられた歌唱教材の中で、その後約10年毎の7回の改訂^{注4)}を通して「共通教材曲」として全掲^{ないし}はほぼこれに匹敵して選択されてきた歌曲には次の10曲がある。

曲名	7回改定中	旧国定教科書 ^{注5)}
日の丸(の旗)	7回掲載	明44, 昭7, 昭16年
春がきた	7回掲載	明43, 昭7, 昭16年
春の小川	7回掲載	大正元, 昭7, 昭16年
冬景色	7回掲載	大正元, 昭7, 昭16年
朧月夜	7回掲載	大正3, 昭7, 昭16年
故郷	7回掲載	大正3, 昭7年
かたつむり	6回(昭55×)	明44, 昭7年
紅葉	6回(昭26×)	明44, 昭7年
こいのぼり	6回(昭55×)	明44, 昭7年
さくら さくら	6回(昭26×)	昭16年初出

新制小学校令における六・三制の実施に伴い、昭和22年文部省から編集発行された音楽科教科書「一から六年生の音楽」を支点に、それ以前の国定教科書群を俯瞰すると、前項一覧に挙げた共通教材曲の10曲中、「さくらさくら」(昭和16年の国民学校教科書が初出)を除いた実に9曲が、「尋常小学唱歌」(明治44年～大正3年発行)に端を発していることが分かる。

小学1, 2年用発行の年(明治44年=1911年)から

本年は丁度100年、1世紀と言う節目を迎える、これらの9曲についてその歌詞背景を探るに当たり、今回の研究では、当時の教師用指導書であった福井直秋著「尋常小学唱歌伴奏楽譜・歌詞評釋」^{注6)}(第1学年～6学年/明治44年～大正3年)を中心として、その克明な指標を改めて紐解くこととする。そこでは日本語で表された日本固有の風景、風土、伝承、人の暮らしと心などなど、学校唱歌を通して生まれ今日まで脈々と歌い継がれてきた「日本人の歌心」の原点となった大切な鍵があるはずである。

「尋常小学唱歌伴奏楽譜・歌詞評釋」巻頭の「緒言」には以下のような興味深い言及がある。

文部省により発行せられたる尋常小學唱歌は、
小學校に於ける唱歌教育の一大進歩を劃したる
ものなり。歌曲共に現代知名の文學家音楽家が
苦心慘憺の餘になれるものなれば、慥に一世の
名作たるべきを必ず後に傳ふべき名作なりと信
ず。(以下省略)

福井直秋^{注7)}は、これらの小學唱歌の優れた曲は世代を越えて何と100年後も愛唱され続けるだろうと予言していたのである。

注4) 昭和26, 36, 46, 55年, 平成4, 14, 23年の7回改訂

注5) 文末の「図版3～7」で各表紙写真を表示

注6) 文末の図版8で表紙写真を表示

注7) 福井直秋(1877-1963)作曲家、音楽教育家、武蔵野音楽学校(武蔵野音楽大学の前身)創設者。

Ⅲ 各曲(共通教材曲)の歌詞背景

「尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釋」※印

「日の丸(の旗)」 明治44年初出楽譜(歌詞・楽譜)

The image shows two pages of the original sheet music for the song 'The Sun Flag' (日の丸の旗). The top page displays the lyrics in vertical columns, and the bottom page shows the musical notation with lyrics underneath.

※語句註解

- 『白地』の『地』は、紙や布巾などの質といふのと同じ語。
- 日の丸染めては、日の丸を染めての意、日の丸は太陽の象、それを染め抜いてといふことである。尤も染め抜くばかりでなく、白地を切り抜いて日の丸を縫ひ附けもするが、これは自宅で作る時のことで、大抵は染め抜きが多いから、この歌でも、さうしたのである。
- 昇る旭の勢。これは諺にも言っている。勢の盛さかんになって来る喩。支那でも旭日登天の勢を言っている。

※歌詞評釋

第一節は、

わが日本の國旗は眞白の眞中に、赤色の正圓まんまるを描き出して居る。何んと美しい旗だらう。
といふ意味で、外形上の美を歌ったので、色の配

合から見ても図案の簡明な點から見ても、潔白光明を尊ぶ国民性には誠にふさはしい旗章で、外國の様な無風流な煩雜なものとは比べ者にならない。

第二節は、

日本の國旗は、朝日がキラ>大空に昇って来るやうな威勢を見せて居る。あ、何んと勇ましい旗だらう。

といふ意味で、國旗に對する我々國民の感じ、即ち旗に現れて居る精神を歌ったもので、勇烈で進取の氣性に富んだ國民、然も國運隆々として謂ゆる旭日登天の勢を示して居るといふ心持の歌である。(以下省略)

『日本の唱歌[上]』明治篇によると、

「日の丸の旗」は一年生の教材。単純明快に日本の國旗を讚美した歌。曲も同じく単純明快。単純明快な日の丸の旗を表すにはかっこうな歌であり、曲である。(以下省略)

昭和16年の国民学校初等科1年「ウタノホン上」で辞句が口語体に修正され、

うつくしや → うつくしい

いさましや → いさましい

白地に赤く → 青空高く (一番の初句)

昭和22年版では一番の初句は元に戻され、

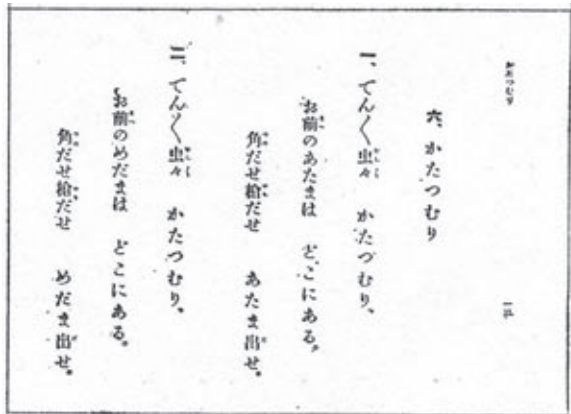
青空高く → 白地に赤く

代わりに二番の初句が、次の様に改められた。

朝日の昇る → 青空高く

あゝいさましい → あゝうつくしい

「かたつむり」 明治44年初出楽譜(歌詞・楽譜)



※語句註解

●『でんく虫、かたつむり』いずれも同じ虫の名。端歌の調子で重ねたのである。『虫々』と重ねたのも同じ譯である。序にいふが、『でんく虫』は、『出出虫』即ち角の出出虫といふ意味から来た名。『かたつむり』は『かたつぶり』といふのが本当であるが、『ぶ』を『む』に言い換えるの、國語では常に用ひ馴れたことであるから、どちらに言っても差支えがない。

●『角だせ槍だせ』は、^{かたつむり}蝸牛がだんく殻から出て、頭を延ばし眼玉を延ばす有様の形容を言ったのである。

※歌詞評釋

読本卷一の二十六頁に、^{かたつむり}蝸牛の畫があつて『でんく虫々、角だせ槍だせ』といふことが出て居るから、この句を用ひて、滑稽な蝸牛の様子を歌ったので、

第一節は、

でんく虫よ、蝸牛よ。何処にお前の頭はあるのか。あるなら早く頭の角を出せ、早く頭の槍を出

せ、早く本当の頭を見せろ。

第二節は、

でんく虫よ、かたつむりよ。何処にお前の眼玉はあるのか。あるなら早く眼玉の附いて居る角を出せ、早く眼玉の附いて居る槍を出せ、早く本当の眼玉を見せろ。

と言ったのである。(以下省略)

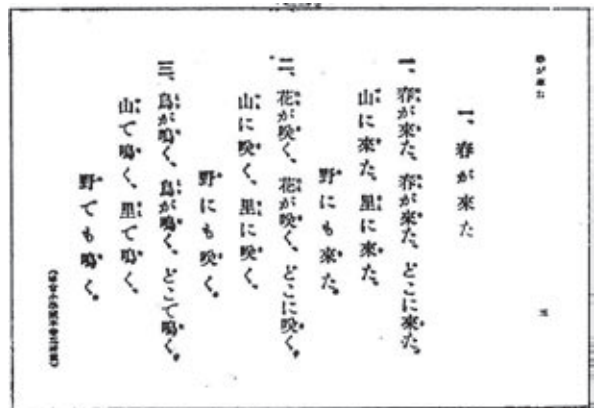
また「日本唱歌全集[上]」明治篇によると、

「かたつむり」の「角」と「槍」とは、それぞれそれぞれ一対ずつの触角を言い、「槍」は尖端に目玉のついている方のことで、これは殻の中に入っているかたつむりに呼びかけた言葉である。明治ごろまで東京での言い方は「まいまいつぶろ」で、わらべ歌でも「まいまいつぶろ、湯屋にけんかがあるから、角だせ槍だせ」と言ったものだった。

とある。

昭和16年の国民学校初等科1年教科書「ウタノホン」で姿を消し、戦後の昭和22年「一ねんせいのおんがく」で復活した。

「はるがきた」 明治43年初出歌詞・楽譜(読本唱歌)



※語句註解

●春が来たとは、春を生物のやうに見て、来るといふ動作の語を用いたので、即ち修辞学でいへば擬人法を用いたのである。我国でも支那でも昔から、春を司る神があつて、支那では太といふ男神であるが、我国では佐保姫といふ女神である。(以下中略)

●山に^レ来た^レ里に^レ来た^レ野にも^レ来た 春が山村野里に^レ来た即ち春色天地に充ちて、霞たなびき花咲き鳥囀るといふ意味である。(以下中略)

※歌詞評釋

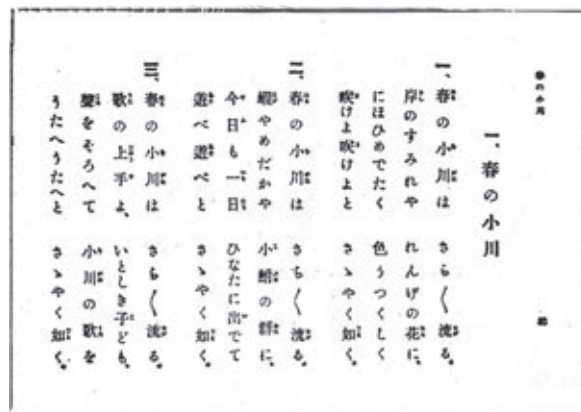
第一、二節の『どこに』は、口語では『どこへ』といふべき処かも知らぬが、しかし山へ里へ野へもと、いはねばならぬやうになると、口調の上に耳障りがある。故に『に』としたのであらう。(以下省略)

〔日本唱歌全集〔中〕〕大正・昭和篇での記述。

何より作詞上で、五句ずつ切れて、言葉が繰り返されているところ、歯切れがよく、春が来た喜びをうまく表わしているが、それにしても、こんなに大らかに歌い上げた手腕は見事である。野上彰氏は、かつて一生に一度こういう詩を自分も書いてみたいと激賞した。そうして(作)曲がまた、春の楽しさを現わしてぴったりである。名曲である。(中略)

昭和16年国民学校初等科2年「うたのほん 下」では、三番の歌詞が省かれたが、一番で春の到来を告げて、二番と三番でそれを“花が咲く”“鳥が鳴く”と具現化して、より一層春の喜びを謳い上げたはずなので、三番を特に省くことに意味が無く、むしろ歌詞全体の色合いが薄れてしまったと思われる。昭和22年「三年生のおんがく」では三番も復活掲載された。

「春の小川」 大正1年初出楽譜(歌詞・楽譜)



※語句註解

●岸のすみれ 堇は誰も知る通り紫色の花で、たまには白色のもある、植物学者は我日本が堇の名産地で、種類が最も多いと云って居る。(中略)

●れんげの花 蓮華草の花即ち漢語の紫雲英である。九州あたりでは『れんげ』を訛って『げんげ』と云って居る。これも春夏の頃に咲くものである。

●にほひめでたく 『めでたく』といふ語は、三通りに解かれる。古い處では、『賞美すべく』『愛すべく』と解く時もあり、『偉麗に』『盛美に』と解く時もあり、然るに現代の意味では『賀すべし』『慶すべし』の意に用ひて居る。

さて然らば、今此の歌詞では孰れの意に用ひて居るかと云ふに、先づ古代の『賞美すべく』『愛すべく』の意に見ねばならぬ。即ち堇の花には香氣愛すべく咲けよ、蓮華の花には色美しく咲けよと囁く如く、春の小川は、さらさら流れて居るの意に取るべきなり。

●いとしき子供 『いとしき』は『かはいい』なり。『子供』の下に『子供よ』と『よ』を付けて見る

べし。

●小川の歌を 歌の上手よ、いとしき子供よ、聲を揃へて小川の歌を歌へと、春の小川は囁く如くさらさら流れて居るの意なり。(中略)

※歌詞評釋

此の歌詞は学年始めの時であるから、季節の上からこゝに挙げたのである。(中略)さてこの歌は、前にも云ふ通り今まで歌はなかった香気のある董の歌や、『小川の歌』などといふ今風な歌ひ口で、餘程新しい匂のする歌詞である。

「日本の唱歌 [中]」大正・昭和篇での記述。

ここからは四年生の教材で、水かさをました春の小川が、音をたてて、しかし静かにゆっくりと野中を流れる情景を歌った名曲である。(中略)樋口清之氏によれば、高野辰之は、「明治神宮の下の、今小田急電車の通っているそばの小川の岸を歩きながら、作った歌だよ」と言ったという。

歌詞の文語体は、昭和17年国民学校初等科と戦後昭和22年の新制小学校の教科書で、次の様に(一部は二回に亘って)口語体に改められた。

一番 流る → 行くよ

にほいめでたく → すがたやさしく

咲けよ 咲けよと ささやく 如く

17年 → 咲いているねと ささやきながら

22年 → 咲けよ 咲けよと ささやきながら

二番 流る → 行くよ

ひなたに いでて → ひなたで およぎ

また、同時に三番の歌詞が削除された。

三番 春の小川は さらさら流る

歌の上手よいとしき子ども

声をそろへて小川の歌を

うたへうたへと ささやく如く

作詩をした高野辰之には子どもが無く、長野の妻の実家から兄の次女・弘子を養女に迎え大変な可愛がりようだったと言う。その子と毎日のように近くの小川のほとりを散策したと伝えられている。高野辰之の思いが最も籠められた主題は、子供への愛情が溢れた三番にこそあるのではと、このエピソードから容易に想像される。確かに一番、二番のみだと詩句が日本の風景に集約されるが、口語体への改作とは別にして、特

にこの第三節の削除は、彼にとっては残念極まりないことであろう。

「紅葉」 明治44年初出楽譜(歌詞・楽譜)

※語句註解

●『秋の夕日に照る山紅葉』は、夕日に輝き映ずる紅葉。

●『松をいろどる楓や葛は』といふは、青々とした松山の間々を彩色して、紅葉した楓や葛が見えるといふ處を言ったのである。(中略)

●『波にゆられて離れて寄って』は、波の為に離れてまた寄ってといふ意にて、散紅葉が水の流に一つに寄ったり、分れたりして居る處を云ったのである。

●『水の上にも織る錦』は、山の上にも青松と紅葉とで、錦のやうになって居るが、散って水の上にも、ゆられ流れて色さまさまに見える處は、水の上にも錦を織のではないかと想像したのである。

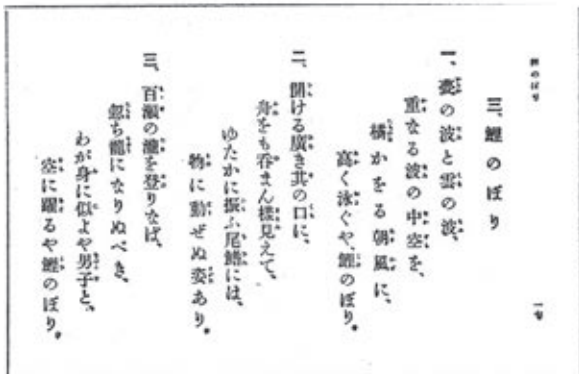
※歌詞評釋

これは時候に依って題材を選んだもので、第一節は、山上の紅葉、第二節は散って水上に流る、

紅葉を歌ったのである。共に錦や裾模様などと着物の色合の美しいのに讃えて譬へて居る。女子には恰好の歌材と思はれる。

さて、『もみぢ』といふ語は、下二段活用の動詞から来た名詞で、『もみづる楓』などと言ってすべて草木の葉が霜の為に赤くまた黄色になる事をいふのである。しかるに、草木の中でも楓の葉が最も紅葉するものであるから、後には楓のことを『もみぢ』、『もみぢ』のことを楓といふようになった。しかし、この唱歌の紅葉は、一般の紅葉を指したのである。

「鯉のぼり」 大正2年初出楽譜(歌詞・楽譜)



※語句注解

- 薨の波と雲の波 薨は屋根に葺いた瓦のこと。薨の波とは薨が波のように、うねうねと畳まって居る處を指して形容した語。『いらか』は『いろこ』即ち鱗といふ語から来たので、素より形容の意から出た語である。雲の波とは白雲が波のやうになって居るのを指して形容した語。
- 中空 薨と雲との中間に見えるそら。
- 舟をも呑まん様見えて。支那の語に、大なる魚

のことを、呑舟の魚といひ、これを志の大なる人にも比喩して居る。幟の鯉の口も大きくて舟をも呑むべくあり、また舟をも呑むほどの志もあるやうにあるとの意。

●物に動ぜぬ姿 悠々と風に泳いでる尾鰭の様子を見ても、物にびくびく驚かぬ豪傑の風が見えると云ったのである。

●百瀬の瀧を云々。龍門の瀧の故事を云ったので、支那の黄河の上に龍門といふ瀧瀬がある。鯉がこの瀧を登ることが出来れば、化して龍となると云はれて居る。依って人間が立身出世して栄達の身になるのに比喩して居る。李白が韓慶荆州に與ふる書の中にも、『一たび龍門に登れば則ち聲價十倍す』と云ふ句がある。そこで、此の歌も、澤山の瀧を過ぎれば龍となる私に倣ひなさい少年諸君よと鯉のぼりが空に躍って居ると云ったのである。

※歌詞評釋

季節の関係上、この歌を入れたものである。幟のぼりとは旗のこと、鯉幟とは布や紙にて鯉の形をつくりたる吹抜きの幟なり、昔の東京人の口前ばかりで実行力のないのを嘲って『江戸兒は五月の鯉の吹流し、口ばかりにて臍はらわたはなし』と云て居る諷刺の狂歌の、『吹流し』が即ち此『鯉幟』である。さて鯉幟を樹て、祝をするのは五月の節句即ち端午たんごの節句あやめ(菖蒲の節句とも云ふ)の時、此節句は男子の節句と定められて、武者人形を飾り武者繪又は鍾道を書いた家々の定紋をつけた幟を樹て、立身出世ことぶを壽く日で、昔、武家式日の中で最も盛なものであったが、今はそれほど盛ではないが、それでも吹流しを樹て或は内幟を飾り、また男兒の生れた初年の節句には、親戚知己より鯉幟または武者人形の類を贈りて、此の日を祝し、その家ではまた返禮として柏餅を贈る風習は残って居るのである。

「日本の唱歌〔上〕」明治篇では、

さわやかな五月の空に翩翩へんぱんとひるがえる鯉のぼりの勇しい姿をたたえて、男の子を祝した歌。歌詞は難しすぎるが、勇壮であり、曲がよく出来ていて、鯉のぼりが風を受けて、あるいは天にのぼ

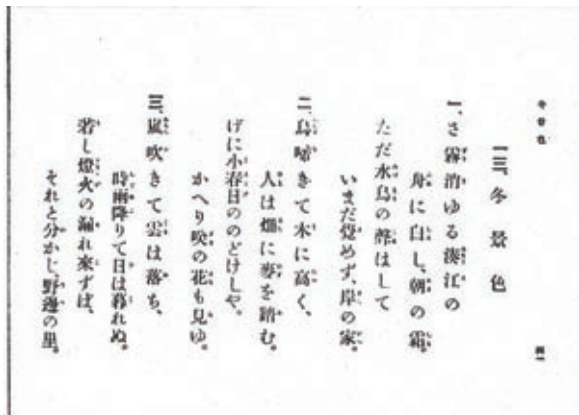
り、また屋根に尾を引きそうになっては、また舞い上がる。その様子を巧みに写して居る。(中略)
昭和22年の新制小学校「五年生のおんがく」で二番の歌詞が削除され従来の三番が二番となったのは、文語体ながら男児の節句の歌でもあることから、骨太の歌詞が全体として重々しいからであろうか。

(削除された二番の歌詞)

開ける広き其の口に
舟をも呑まんさま見えて
ゆたかに振るふ尾鰭には
物に動ぜぬ姿あり

瓦葺きの屋根も減ってきて、「鯉幟」自体も最近も昔ほど揚げられなくなり、日本の伝統文化が次第に廃れていく現象がある昨今、今日の子どもたちにとって歌詞の難解さがあるとはえ、この歌から広がる大らかで清しい風景を、しっかりと味わわせたい曲である。

「冬景色」 大正2年初出楽譜(歌詞・楽譜)



※語句註解

●さ霧 『さ』は単に上に着けた発語で、霧と同じ。

●湊江 湊の^{いりえ}入江の事。

●鳥啼きて木に高く 鳥木に高く啼きてと云ふと同じ。

●人は畑に麦を踏む 麦を踏むといふのは、麦が少し芽を出した時、(読本巻十の第九課は『冬景色』で、『畑には麦がもう一寸ほどのびて居る』とある)農夫がその根の處を踏み固むるのを云ふ。俳句には^{むぎふみ}麦踏といふのを春季にしたれど、冬の初に蒔いた麦の少しのびたのを小春日(冬の暖かな日の事)に踏むのを指して云ったのである。

●かへり咲きの花も見ゆ 小春日のほかほか暖いために、むくげなどが、^{かへりざき}ちらほら回咲をした處を云ったのである。

●それと分かじ野邊の里 『それと』とは村里を指したので、村里とも分かるまい野邊の里はと云ふ意。

※歌詞評釋

読本巻十第九課に『冬景色』と題して、第一節は朝の川邊の景色、第二節昼の田畑の景色、第三節は晩方の野中の景色を歌ったのである。(以下省略)

「日本の唱歌[中]」大正・昭和篇では、

冬といっても初冬の田園の朝・昼・夜の景色を簡潔に述べたもの。第一節は湖畔、第二節は山畑、第三節は村落の景色を歌っているが、文部省唱歌で一、二を争う、詩趣の深い名歌詞と思う。作者を知りたいが、明らかでない。第二節で、麦というものは踏んで育てるものだという事を都会の子どもに教えてくれた。(以下省略)

昭和22年の「五年生のおんがく」で、三番の歌詞が省かれた。冬の一日の景色の移り変りが歌われているので、夜の風景のみが省かれるのは腑に落ちないが夜の風景の三番が些か暗く、明るい昼間の光景で打ち切ることが好まれた結果だろうか。それとも口語体に変えられなかったがために、やはり“漏れ来ずば”、“それと分かじ”などの文語体の難解さが今更に嫌われたのだろうか。

(省かれた三番の歌詞)

嵐吹きて雲は落ち
時雨降りて日は暮れぬ

若し^{ともしび}燈火の漏れ来ずば
それと分かじ野辺の里

これらの三番に亘る歌詞全体を、一番を人生の揺籃期、二番を活動期、三番を休息期という人の一生に喩えた解釈をする研究家もいて、そうなると人生の終盤期の三番が欠けるのはやはり舌足らずとなり、一方嵐の激しさや冬の日暮れの寒々とした光景が抜けてしまって、冬の表現としても不十分となり残念の一言である。

「朧月夜」 大正3年初出楽譜(歌詞・楽譜)

三 朧月夜

一、菜の花畠に入日暮れ、
見わたす山の端 霞ふかし、
春風そよふく 空を見れば、
夕月かゝりて にほひ流し、
二、里わの火影も、森の色も、
田中の小路を たどる人も、
蛙のなくねも、かねの音も、
三、さながら霞める 朧月夜

※語句註解

●菜の花畠 菜と云へば^{あぶらな}蕒菜又は唐菜のことであるが、こゝでは^{あぶらな}蕒菜のことである。しかし國によると『あぶら菜』と云ふよりは唯『なたね』と云った方が通ずるかも知れぬ。

『菜の花の花盛り』と云ふことを『菜種の花盛り』とも云って居る。けれども『なたね』は即ち『菜種』で、その實のことである。要するに、『菜の花畠』は菜の咲きて居る畠である。

●山の端 山の端^{はし}即ち山の裾。山の裾。故に『山の端霞深し』は山の麓あたりは霞が濃くたなひい

て居ると云ふことなり。

●夕月かかりて ^{ゆうべ}夕の月が空に懸りてなり。

●にほひ深し 『にほひ』は此處にては鼻感に知られる香の意にあらず。色の光りとか色の艶とか云ふ方のにほひなり。即ち夕月の影の色が薄白いと云ふことなり。

●里わ 里の廓の意。村里のこと。

●さながら霞める朧月夜 『さながら』は『すべて』の意。即ち村の燈光も森の色も道行く人も、また蛙聲も夕鐘の響まで^総て朦朧と霞んで遠退いて居るやうな朧月夜であるわいと云ふ意。

※歌詞評釋

この歌題は教授上季節に當るから選定したのである。

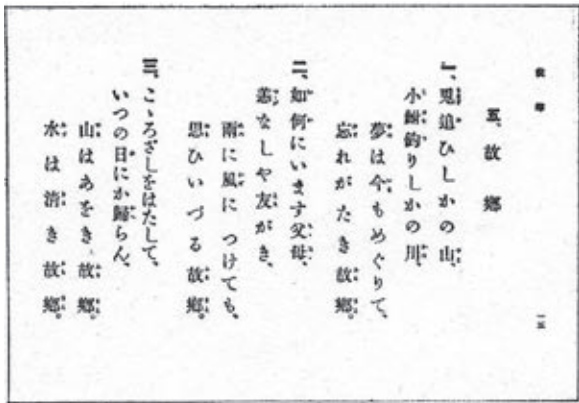
第一節は春の夕暮れの叙景である。菜の花畠と夕日夕月の配合は俳句の趣味には昔から慣用された材料である。(中略)

第二節は夕日己に落ちて夜となり、夢の如き月影、天の一方に現はれて田園の光景全く淡月の裡に包まれ、物の色、物の影、はたまた物の聲までも、朦朧たる月影に同化一体となりたるが如き春の宵の光景を描寫したのである。物の色、物の影の霞めると云ふは通常の云ひ口なれども物の聲の霞みて聞ゆると云ふ歌詞の見付けどころなり。

「日本の唱歌[中]」大正・昭和篇では、

『尋常小学唱歌』の中で一、二を争う傑作と言われる歌である。題材は朧に匂う田園の春の情調を歌ったもので、第一節から第二節に移ると、まだほの明るい夕刻から、暮色がすでにあたりを包んだ夜への時間の推移を表している。子どもにそのころの自然の美しさの鑑賞を教えて遺憾なかった。歌詞の美しさにそえて、曲もすばらしく、多くの人が小学校で覚えて生涯忘れがたい曲として懐かしんでいる。(以下省略)

「故郷」 大正3年初出楽譜 (歌詞・楽譜)



※語句註解

- 夢は今もめぐりて 夢は今もその山や川のあたりをめぐりてと云ふことなり。めぐりては通りての意に同じ。通ふの意を『めぐる』と云ひ更へたのは槩に支那の漢詩の修辞に習うたのである。
- 恙なしや友がき 恙とは『障り』また『病』と云ふに同じ。『友がき』は友達の古言なり。故にこの句は『無事で居るか友達よ』の意。
- 志を果して云々 我志を成し遂げて何日錦を着て故郷へ帰るゝ事であらうぞと云ふ意。『山は青き故郷水は清き故郷』は共に『故郷』の下に『に』を入れて解釋すべし。

※歌詞評釋

小学校生徒は遊学して居る時代でないから故郷といふ題目は了解に苦しむだらうと云ふ人もあらうが、我現在成長しつゝ、ある處即ち故郷は此の如く懐しいものであると云ふ感じを吹込むつもりで作ったのである。郷土を愛するの念は、これ國家を愛するの念なり。郷土を思ふの念は郷土を離れて始めてしむ沁みじみと感じられる思ひである。

郷土を離れたもの、愛郷の情を想像させることは訓育上智育上恰好の材料ではあるまいか。

なほ一言すべきはこの歌詞は従来の形式と違ひて六四調である。六四調は三拍子の歌に都合良いもので、西洋の唱歌にも多くの例がある。

「日本の唱歌 [中]」大正・昭和篇では、

「朧月夜」と並んで、多くの人に愛される点で、文部省唱歌の双壁。あるいは一般的という点ではこちらの方が上かもしれない。「兎追ひし」「小鮒釣りし」などの具体的な叙述にあわせて、故郷を懐かしむという日本人に何より嬉しい思想が人気を博した所以である。(以下省略)

ここで取り上げる [さくらさくら昭和16年初出] を除いた共通教材曲9曲の内、次の6曲は、

- 日の丸の旗、春が来た、春の小川、朧月夜、故郷、紅葉

共に、文部省の教科書編纂委員であった作詩・高野辰之、作曲・岡野貞一のコンビに拠るものである。



高野辰之 (1876-1948)



岡野貞一 (1878-1941)

国文学者で“斑山”の号を持つ高野辰之は、長野県下水内郡の農家に出生。長野師範を卒業後、中等教員国語科試験に合格して学界に入った。日本の歌謡史の開拓者として名高く、その『日本歌謡史』によって文学博士の学位号が与えられた。長く東京音楽学校の教授をつとめ、かたわら東京大学の講師として『日本演劇史』を講じた。豪放磊落を地でいく人物で、堂々たる巨軀を教壇に運び、当時初めて許可された女子聴講生が大勢出席している教室でも、際どい漫談を飛ばすなどして人気があったという。

一方、作曲家の岡野貞一は、鳥取県岩美郡に出生。没落氏族の家柄は経済的に苦しかった。14歳で洗礼

を受けたが、そこには教会でオルガンを弾きたい、音楽に触れたいと言うひたむきな気持ちがあった。その宣教師から楽才を見出されて東京音楽学校に進学し、専修部を卒業後、同校の教授を勤めた。貞一は一生を通じて熱心なクリスチャンで、東京の本郷に家を構えてからは、近くの教会で日曜ごとにオルガンをひき、それは40年に及んだ。人柄は高野辰之とは対照的で温厚にして謹厳実直、授業中に冗談を言って生徒を笑わせるようなことは一度もなかったと言う。

「さくらさくら」 昭和16年初出楽譜(うたのほん下)



「尋常小学唱歌」掲載の歌曲ではないことから、由来についてのみ触れることとする。

教科書での初出は、昭和16年国民学校初等科2年「うたのほん下」^{注8)}。原曲は、明治21年文部省音楽取調掛^{注9)}が編集し、東京音楽学校発行の「箏曲集」におさめられていたもので、教科書掲載での歌詞は、一

部元の言葉を残したものの次の様に改作された。

(「箏曲集」の歌詞)	(初出～現在の歌詞)
さくら さくら	さくら さくら、
弥生のそらは	野山も、里も、
見渡すかぎり	見わたす かぎり、
霞か雲か	かすみか、雲か、
匂いぞ出ずる	朝日に にほふ。
いざや いざや	さくら さくら、
見にゆかん	花ざかり。

「日本唱歌 [中]」大正・昭和篇の記述。

箏曲で「姫松小松」の次くらいに習う入門曲。平野健次氏によると、江戸時代は、「さいた桜」という題の歌で、

咲いたさくら
花見て戻る 吉野はさくら
竜田はもみじ 唐崎の松
ときわ ときわ 深緑

という欲張った内容だったのを、『箏曲集』の編者^{注10)}が、すっきりしたものに改めたと言う。

平和な日本の風景と、しとやかな日本女性を思い浮かべさせる美しい曲である。(中略)

IV おわりに

明治44年発行の「尋常小学唱歌」は昭和7年に20年余を経て増補改訂された。とは言え、内容は殆ど踏襲されたので、昭和16年の国民学校で掲載曲が一変するまでの約30年余、小学校音楽教育の現場で変わらず使用された。教科書発行に準じて(明治44年～大正3年)出版された教師用指導書「尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釋」(福井直秋著)も同じく30年余に亘って学校現場で指導の伴侶となっていた。

当時の音楽界では、所謂“言文一致運動”が一般国民には大いに受け入れられ持て囃されていたので、これらの学校唱歌はとにかく面白みに欠ける音楽と言うレッテルが貼られて、“学校唱歌校門を出ず”と嘲られていたことも確かである。言文一致運動の旗頭である

注 8) 文末の図版4に初出楽譜表紙写真

注 9) 東京音楽学校(現東京芸術大学音楽学部)の前身

注10) 音楽取調掛長の伊沢修二と里見義、加部巖夫の三名

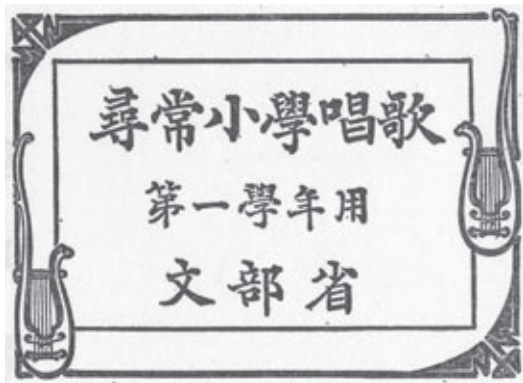
作曲家の田村虎三と文部省唱歌の指導書を編んだ福井直秋との激しい論戦は、その応酬を掲載して斯界の雑誌（「音楽界」と「音楽」）を約半年に亘って賑わし、大変な戦いであったことが後世に伝えられているのも事実である。

しかし、これらの学校唱歌における日本語の美しさや文語体表現の格調高さによって、「日本の原風景」が余すことなく謳われていることも明白である。お堅いと敬遠されがちな“語句と歌詞の意味”をしっかりと把握することで、むしろ十分に味わいつくすことができることも改めて確認できた。そこにこそ発行の年から100年を経ても私達日本人の心に今なお深く鮮やかに響いてくる「源」があるのだと実感するのである。

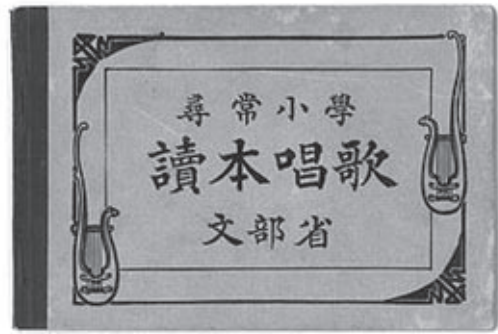
今回の研究では、「尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釋」が限られた教育系図書館で禁帯出対象の古文書扱いとなっているため、原本を辿ってそこに赴き、9曲の共通教材曲について集約して紐解くこととなった。

言語学者・金田一春彦と声楽家・安西愛子共編の名著「日本の唱歌 [上・中]」明治、大正・昭和篇の中では、各曲についての詳細な背景研究の記述も然ることながら、唱歌一曲一曲にまつわる思いについて日本各界の様々な著名人からの聞き取りが書かれている。初版から30年余を経た現在も、読む者に全くの同感と共感を覚えさせる。ここでも「唱歌教育」の果たしてきた“普遍性”の素晴らしさを強く認識する次第である。

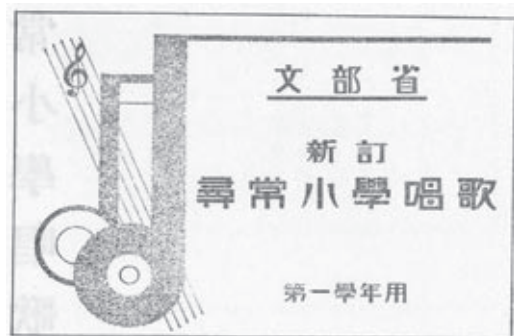
次の研究(その3)では、共通教材曲として今回の10曲については他の指導書も紐解き、これらの曲以外に掲載回数が準じる曲および削除されていた名曲についても、引き続きその歌詞の背景を探っていくたい。



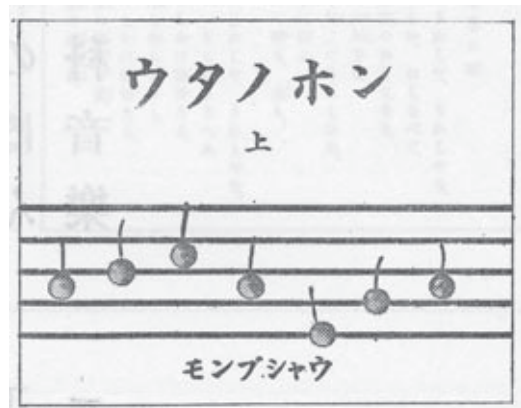
図版1 尋常小学唱歌表紙 (明治44年)



図版2 尋常小学読本唱歌表紙 (明治43年)



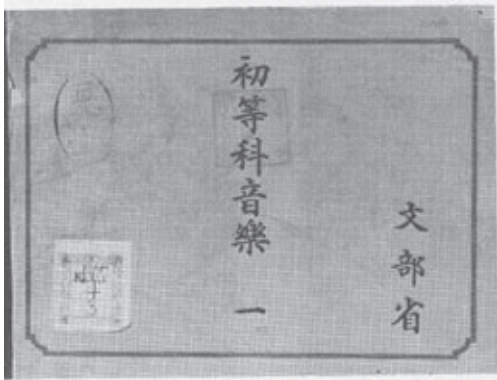
図版3 新訂尋常小学唱歌表紙 (昭和7年)



図版4 ウタノホン上 表紙 (昭和16年)



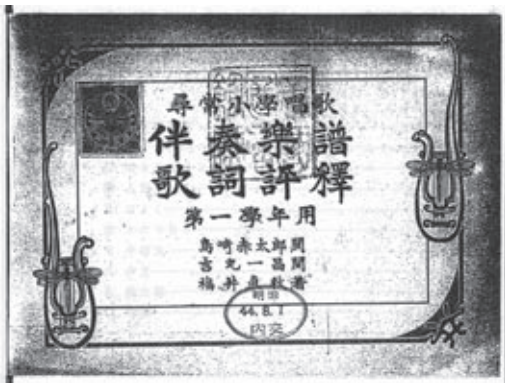
図版5 うたのほん下 表紙 (昭和16年)



図版6 初等科音楽一 表紙(昭和17年)



図版7 一ねんせいのおんがく表紙(昭和22年)



図版8 尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釋(明治44年)

引用文献

- 1) 福井直秋著「尋常小学唱歌(伴奏楽譜)歌詞評釋」共益出版商会, 明治44年~大正3年刊, 第一, 第二, 第三, 第四, 第五, 第六学年の該当曲欄
- 2) 金田一春彦・安西愛子編「日本の唱歌 [上]」明治篇, 講談社, 1977年, 「日本の唱歌 [中]」大正・昭和篇, 講談社 1979年の該当曲欄
- 3) 日本教科書大系「近代編第25巻唱歌」講談社, 昭和40年, 該当曲楽譜(歌詞)及び表紙写真

参考文献

- 1) 島津哲夫「小学音楽教科書の変遷」研究文献, 教科書研究センター付属図書館蔵
- 2) 堀内敬三・井上武士編「日本唱歌集」岩波書店, 1958年
- 3) 池田小百合編「童謡と唱歌 歌の歴史①」夢工房2002, 「童謡と唱歌 歌の歴史②」夢工房2002年
- 4) 「小学生のおんがく1~6」指導書[研究編], 教育芸術社, 2010年
- 5) 金田一春彦・安西愛子編「日本の唱歌 [上]」明治篇, 講談社, 1977年, 「日本の唱歌 [中]」大正・昭和篇, 講談社 1979年
- 6) 鮎川哲也著「唱歌のふるさと 花」音楽之友社, 1992年 「唱歌のふるさと 旅愁」音楽之友社, 1993年
- 7) 青柳善吾著「本邦音楽教育史」改訂新版, 青柳寿美子発行, 昭和54年(※初版は昭和9年, 日本教育音楽協会著)
- 8) 鎌谷静男著「尋常小学校読本唱歌編纂秘史」文芸社, 2001年